書評

布留川正博『イギリスにおける奴隷貿易と 奴隷制の廃止——環大西洋世界のなかで』 (有斐閣、2020年)



森井 一真

本書は、18世紀中葉から19世紀のイギリスを中心に、環大西洋世界を 視野に入れ、奴隷貿易および奴隷制廃止の展開を総合的に論じたものであ る。著者は、長年に亘り、奴隷貿易・奴隷制廃止にかかわる論考を公表し ており、それら諸論考は、当該分野の基本文献となってきた。それを一冊 の書籍に整理した本書は、これまでもそうであったように、このテーマを 研究する際の必読文献となるであろう。

本書は、基本的に時系列に沿って、イギリスにおける奴隷貿易の廃止 (1807年、第2章)、奴隷制の廃止 (1833年、第6章)、年季奉公人制の廃止 (1838年、第7章)がどのように展開したかを整理する。その射程は、本国に限定されるものではなく、大西洋の両岸に広がる。第1章では、前提として西インド植民地の経済状況をめぐる研究史が、第3・4章では、アボリショニストたちが試みたシエラ・レオネ植民地への黒人移送計画と現地社会での展開が、第5章では、ブラジルにおける奴隷貿易の興隆とその廃止が論じられる。さらに、第8章では、以上で検討された奴隷貿易・奴隷制廃止の展開がチャーティズムと接続され、イギリス本国の労働問題と奴隷制廃止問題の相互関連が議論される。

本書の特長は多岐に亘るが、ここでは以下、3点を挙げたい。第一に、 序章と第1章で詳細な研究史の整理と再検討が行われた点である。奴隷貿 易・奴隷制廃止は、19世紀以来の膨大な研究蓄積をもつ論争的なテーマで ある。本書は、人道主義的解釈と経済的解釈の対比によって研究史の全体 像を整理しつつ、第1章で、エリック・ウィリアムズの「衰退理論」をめぐ る研究を再検討する。統計資料を用いて、西インド植民地の経済状況を確

『ヴィクトリア朝文化研究』第19号 (2021年)

認することで、経済的解釈の前提を現在の研究動向に沿った形で提示する。 第1章のもととなった論文は、2003年初出で、これまでも参照されてきた。 しかし、本書ではそれに加えて、あらたに序章で、より射程の長い研究史 が書き下ろされた。そこでは、ウィリアムズ以前の研究史を含め、アボリ ショニズムがもったイデオロギー的機能や奴隷反乱の影響をどう評価する かといった、1970年代以降議論された主要な論点が提示される。読者は、 序章と第1章を併せて通読することで、奴隷貿易・奴隷制廃止の因果をめ ぐる議論の全体像を理解することができるであろう。

第二の特長として、奴隷貿易・奴隷制廃止の実際の進行を詳細に分析・ 整理した点が挙げられる。本書の軸となるのは、本国の社会運動と議会審 議の展開を論じた、第2章(奴隷貿易)、第6章(奴隷制)、第7章(年季奉 公人制)であろう。これらの章では、当時出版された各種パンフレット類、 手稿史料などを一次史料として、議会内外の様相が具体的に論じられる。 イギリスの場合、奴隷貿易・奴隷制廃止は、どちらも本国議会の立法によっ て実行されており、議会審議は議論の前提として19世紀以来分析されて きた。それに加えて、クェーカー教徒を中心とする議会外運動の実態や、 それと呼応する議会における審議過程の詳細が、1970年代後半以来の社 会史的研究の蓄積、また1990年代以降盛んになった言説研究の蓄積によっ て明らかにされてきた。本書は、その成果を凝縮したものと評価しうる(第 2章の初出は1998年、第6章は2010年、第7章は2013年であった)。また その記述は、単に時系列に事実を羅列したものではなく、折々に必要な論 点を整理するとともに、廃止運動に関する豊かな人間関係と言説を論じる ものとなっており、読者は運動の展開を立体的に把握することができる。

第三の特長として、大西洋の両岸に広がる奴隷貿易・奴隷制廃止の影響 と、相互の関係性を論じた点が挙げられる。大西洋史のような地理的に広 範な議論を展開する際に、異なる地域間を比較するか、その関係性を探究 するか、その方法は多様である。たとえば、鈴木英明『解放しない人びと、 解放されない人びと――奴隷廃止の世界史』(東京大学出版会、2020年)は、 奴隷廃止を世界史的共通経験として論じる。同書では、世界中に広がった 奴隷廃止という事象を、接続性と共時性、ふたつの連関が作用して生じた ものと捉える。ここでいう接続性とは、「実際に人びとのあいだで行われ る有形・無形の交換や収奪によって、人びとが連関すること」であり、共時性とは、「ある出来事を共有することで生じる連関」である(同書13頁)。

本書においても、奴隷貿易・奴隷制廃止の広がりを具体的な人や集団によるつながりから論述する方法(接続性)と、イギリスのアボリショニズムが複数の地域に及ぼした影響を記述する方法(共時性)が用いられる。たとえば、第2章では、国教会福音主義派(クラパム派)が奴隷貿易廃止運動の展開を牽引したことが示されるが、第3章では、その彼らが、シエラ・レオネ植民地への黒人入植運動を主導したことが論じられる。彼らは、奴隷貿易廃止については人道主義者として理解される一方、シエラ・レオネ入植の事例を通じてみれば、植民地主義者として評価され、アボリショニズムが植民地主義と表裏一体の関係にあったことが示される。ここでは、クラパム派という集団が、本国の社会運動とシエラ・レオネでの社会実験それぞれに実際に関与しており、大西洋の各地に広がる具体的なつながりが示された。続く第4章では、その「シエラ・レオネに送られ解放されたアフリカ人の処遇と運命」(102頁)が論じられる。これらは、鈴木の枠組みを借りれば、接続性を示す章立てである。

それに対して、第5章では、ブラジルにおける奴隷貿易の興隆が論じられる。イギリスは、自帝国における奴隷貿易を廃止したあと、他国にも奴隷貿易の禁止を求めて、外交的・軍事的圧力を加えた。一方、ブラジルの奴隷貿易は増勢に転じていった。この章では、イギリス・ブラジル間の交渉過程が分析されるとともに、ブラジルで奴隷貿易が可能になった条件や、環境が変化するなかで多様な協力者を獲得したブラジル現地商人たちの巧みな活動が示される。これは、イギリスの奴隷貿易廃止という事象が別の地域に及ぼした影響を論じたもので、ある種の共時性の観点から環大西洋世界を接続する試みである。

以上のように整理した際に、本書そのものの課題というよりは、本書から発展的に検討しうる課題として、以下2点を指摘したい。

第一の課題は、アボリショニズムへの抵抗に関する研究動向との接続についてである。本書は行論のなかで奴隷貿易・奴隷制廃止に多様なアクターが関与したことを示した一方、それに対して抵抗した人々にも一定の紙幅を割いている。特に第5章では、奴隷貿易(ときに奴隷制)を存続させたブ

ラジルのプランターや商人たちが詳細に検討された。一方、近年、イギリ ス本国と西インド植民地を対象とするものを中心に、アボリショニズムへ の抵抗を再検討する研究が蓄積されはじめている。UCLの研究プロジェ クトでは、奴隷制廃止に伴って賠償金を得た人々を中心に、西インドに利 害関係をもった、あるいは奴隷制に関与した人物のデータベースが作成 されている (Catherine Hall et al., Legacies of British Slave-Ownership: Colonial Slavery and the Formation of Victorian Britain, Cambridge University Press, 2014)。また、イギリス本国に強い奴隷制支持の言説があったことも明ら かになっている (Paula E. Dumas, Proslavery Britain: Fighting for Slavery in an Era of Abolition, Springer, 2016)。こうした動向と第5章の議論から、アボ リショニズムに対する抵抗の観点からも、環大西洋の広がりを論じること ができるかもしれない。

第二の課題は、奴隷貿易・奴隷制廃止の広がりを、地理的にどこまで広 範に捉えられるかについてである。第2章から第4章にかけて、クラパム 派というアクターを媒介とした接続性が示され、第5章では、イギリスの 奴隷貿易廃止という事象がブラジルという他地域にもたらした影響(共時 性)が論じられた。それぞれの章では具体的な人や集団の活動が検証され、 堅実な実証が積み重ねられている。しかし、本書が示した実際上の関係性、 特に接続性を実証する方法は、一定の地理的な範囲を超えると、活用しづ らくなる可能性がある。環大西洋世界を越え、より広い文脈で論じようと するとき、どのような方法が可能であろうか。本書はこの課題に対しても 一定の方向性を示していると考えられる。

先述した鈴木『解放しない人びと、解放されない人びと』は、西インド 洋世界から東南アジア、日本までを射程に、奴隷廃止を論じた。その際、 奴隷制を厳密に定義しないことでむしろ適切な議論が展開できることを指 摘する(同書、11-12頁)。同様に、本書第8章では、奴隷と労働者を区別 せず、労働者をより広義に捉える視角が議論される。これは、奴隷制の問 題を労働問題へと拡大し、より広範囲に亘る奴隷制の世界史を描くための 議論としても捉えられる。実際、著者は、2019年に、奴隷貿易の広がりと その廃止を世界史のなかで論じた『奴隷船の世界史』(岩波新書)を出版し ている。そこでは、本書の中心となる内容を新書に適した形で論じたうえ

で、19世紀を通じて、奴隷から移民へ、労働力の形態と人流が転換したこと、そして現在でも、奴隷制に類する労働形態が存続することを論じている。

著者は、本書第8章で「アボリショニズムとチャーティズムの歴史的な連続性については、さらに多くのことが実証されなければならない」(233-4頁)と指摘する。奴隷貿易・奴隷制廃止をより広く捉える試みとしても本書の議論は今後のさらなる研究を促しているのではなかろうか。

一大阪大学大学院·日本学術振興会特別研究員 DC